39

『家庭衛生及び治病』（大正4年刊）にみる高木兼寛の医療観

蝦名　總子[1)]，平尾真智子[2)]，芳賀佐和子[3)]

[1)]慈恵看護専門学校，[2)]順天堂大学医史学研究室，[3)]東京慈恵会医科大学

高木兼寛（1849–1920）は明治・大正期をとおし海軍の衛生改善をはじめ，医学教育・看護教育・公衆衛生に尽力した海軍軍医・医学教育者である．彼の功績は松田誠氏の大著『高木兼寛の医学－東京慈恵会医科大学の源流』（2007）に詳細が記されているが，今回新たに未収載の文献『家庭衛生及び治病』が発見された．本書にみられる高木兼寛の医療観の内容と意義について考察する．

高木はイギリスのセント・トマス病院医学校を卒業後，明治14年に成医会講習所（後の慈恵医大），15年に有志共立東京病院（後の慈恵医大病院），18年に看護婦教育所（後の慈恵看護専門学校）を創設．東京海軍病院長，海軍軍医総監などを歴任，海軍兵食改善で脚気予防に成功，貴族院議員，東京府教育会会長，政府の臨時教育会議委員も務めている．高木の著作は創刊した『成医会月報』の論文・記事の他には新聞，雑誌に掲載された記事や講演内容が主であり，書物は少ない．

今回の『簡易実用：家庭衛生及び治病』は国会図書館所蔵で，大正4年，大学館（神田区）発行である．縦15cm横10cm全294頁である．編者言に「本書は医学博士男爵高木兼寛先生に請ふて，一般家庭に於いて実行の容易なる衛生萬般に就きて其の講述を編纂したるもの也」，巻頭言に「夫れ衛生の事は，吾人其身体の安全を期し，生存を保ちて天寿を完ふせんとする上に於て，能く実行せざるべからざる事なり．然るに世人は衛生の事を知りて行はざるあり，知らずして行はざるありて，然も之れが為に疾病に罹る者多き現状也．本書主として家庭に於て実行簡易なる健康衛生と，疾病注意を掲げて一般家庭の参考に資する所あらんとす」とある．

目次は大きく第1編健康衛生，第2編疾病注意法の2つからなる．前者は，体力増進を計るの道，健康保全上改良すべき諸点，食物衛生法，疾病予防法，此点を実行せよ，帽子全廃奨励，娯楽と実益と衛生，生活の根本軌道，先づ此点が肝要なり，大に奨励すべき一事，余が実験の子女養育法，六根清浄，師弟教育論，精神衛生法，心は斯く持て，の15項目，後者は，一般患者に告ぐ，内科に関する病気の注意，外科に関する病気，耳鼻咽喉病の注意，小児病の注意，精神病の注意，眼病の注意，胃腸病の注意，婦人病の注意，皮膚病の注意，妊娠中の注意，盲腸炎の注意，神経病と神経質，海水浴の注意，の14項目で構成され，さらに小項目がある．

彼の医療観が述べられているのは，第2編疾病注意法である．「内科に関する病気の注意」のなかの小項目「医学は万能に非ず」には「医学は自然に付与されて居る身体の生理的機能を幇助するに過ぎぬ」とし，「現今医学の教ゆる所に従ひ進んで斯学の研究をなし，細心治療の方法を講ずるものは良医である」という．また「外科に関する病気」の「衛生思想皆無の主婦」では「衣食住の三者一として衛生を根元として居らないものはないのである．即ち吾々人間が生活するには衛生を度外にしては一日も生活する事が出来ない」と衛生の重要性を，「小児病の注意」の「看護の注意」では「小児の病気は薬餌よりも看護が大切である」と看護の重要性を説いている．「眼病の注意」では「小便と乳汁の迷信」，「危険なる神水」などの項目があり，迷信を信じないように注意を促している．

本書は彼の人生においては晩年の作品であり，これまで実践・啓蒙してきたことの集大成ともいえる内容である．一般家庭向けのため，専門家に向けたのではないかたちで，高木の信条が率直に表現されている．わが国で最初に看護教育を行った高木の医療観は，ヒポクラテス流の自然治癒力を信じ，医学は自然を助力するものという考えを持ち，衛生・看護の重要性を認識していたこと，また迷信を退ける科学者の姿勢を持っていたことが明らかとなった．